

ばってん

事務長会報第29号

平成23年3月31日

長崎県公立学校事務長会

鳴滝高等学校内

〒850-0011 長崎市鳴滝1-4-1

電話 095-820-0056



ホテル **もてし** 長崎

TEL 095-822-2251
長崎市筑後町4番10号



むかし

大雪に故郷を想う

副会長(佐世保北高等学校) 柏井 澄夫

「ウワー〜！」年末年始休暇で、いつもよりゆっくりと目覚めた（それでも、歳のせいかわake前には覚めてしまうんですが）平成22年大晦日の朝、玄関を開けた途端、真っ白な世界が寝ぼけ眼に飛び込んできました。前日からテレビの天気予報では盛んに「この冬一番の寒気が襲来。平地でも積雪…」と報じていましたが、まさか一晩のうちにこれほど積もるとは。少々の雪には驚かない私も、今回はさすがに……。年を跨いで元日までの二日間は外出もままならず、窓辺に降り積もる雪を見やりながらしみじみと故郷の冬を想いました。

私は、いまではいっばしの長崎人を気取っていますが、実は、鳥根県で生まれ育ちました。高校を卒業するまで過ごしましたので、長崎暮らしはもう40年にもなります（歳が判てしまいますね）。

「鳥根県」と聞いてすぐに「ああ、あそこか」と地図が浮かぶ方、エライ！世の中の半分くらいの人（もっと多いかな？）はご存じないようで、北陸や東北地方をイメージする人も多いそうです。神々の故郷「出雲大社」、本県よりも一足先に世界遺産に登録された「石見銀山」、古くは鳥流しのメッカ「隠岐島」、お酒好きのアナタにお勧めのシジミで有名な「宍道湖」、あたりが鳥根県の代表選手でしょうか。感謝のことは「ありがとう」を「だんだん」と言い表すのも我が故郷です。数年前のNHK朝の連続テレビ小説、覚えてますか？

そんな鳥根県を、「鳥根は鳥取の隣です！」との文字と地図の入ったTシャツを着てPRしているテレビ番組を偶然に見たときは、可笑しくも哀しい気分させられました。でも全国で一、二位を争うものもあるぞ、平均寿命、交通事故死者数（少ない！）、高齢化率だってすごいんです。でも、これって自慢になるのかな？

故郷自慢(?)はこれくらいにして。鳥根県と鳥取県はまとめて「山陰地方」と呼ばれます。山口・広島・岡山県を「山陽地方」と呼ぶのに比べていかにも……ですが、夏でも「弁当忘れても傘は忘れるな！」が合い言葉の土地柄ですから、冬場は推して知るべしです。雪や雨は降らなくても曇り続いた日が続き、家の中では昼間でも電灯が欠かせません。1〜2月の半分くらいは雪マークで、平地でも20〜30センチの積雪は当たり前。公共交通機関はさすがに慣れたもので、多少の積雪でも平常運行です。私も高校時代には15、6センチくらいの積雪路を当然の如く自転車通学をしていま

した。（積雪のため休校！なんて嬉しいことは記憶にありません。）

小学生の頃、雪の中での遊びといえば、雪合戦。と言っても、この辺でキャーキャー言いながら手当たり次第に雪を丸めて投げるようなヤワなものではなく、正式に敵・味方に分かれて、まずは半カマクラ状の基地と武器となる雪玉を作った後、ヨーイドンで投げ合います。飛び交う雪玉を避けながら少しづつ敵陣に近づき、早く崩した方が勝ちというルールですが、それはもう痛い思いをしたものです。何故なら、雪玉には威力を高めるため小石を詰めたり水で固めたりといった工夫が凝らしてあるんです。でも、大怪我する奴はいなかったなあ。

近くの裏山で竹スキーやソリで遊んだのもその頃です。雪が溶けると畑になる我々がゲレンデは4〜50メートルもあつたかな、小さな身体には結構長く感じました。途中で1メートルくらいのジャンプ台を築いて、ヒネリとかちよつとした技を競い合ったりしました。斜面の終わりには「この先危険」を知らせるブロック塀が立ちほだかり、時々調子に乗って「危険域突入!!」の勢いで滑りくる私たちが優しく受け止めてくれたっけ。

就職してしばらくの間、話す言葉がナガサキ語じゃなかったせいか、しばしば「出身地はどこ？」という質問を受けました。「鳥根県」と答えると、「それじゃスキーは得意だろう。」と続きます。鳥根県といっても、冬になればどこもかしこもスキー場になるわけではありません。でも、「冬は他にすることありませんからね〜。」などと中途半端に答え、「デキるっ！」て思われたことも多々あります。が、実際のところ、私のスキー歴とはこんなものでした。海洋県長崎だからって、みんなが泳ぎ達者、釣り名人というわけじゃありませんよね。

「雪」に託けてとりとめもないことを（括弧やカギ括弧も駆使して）書き綴っているうちに、やっと所定の字数が埋まる目処がつかしました。「齢を重ねるにつれ暮る故郷心」などと言いますが、哀しいかな、そろそろ私もその域に達しつつあるようで、もう一つの加齢症状「諳さ」が顕れないうちにペンを置くことにします。

終わりに一つお詫びを。西郷広報部長さんから依頼された際の「何でも、好きなように…」の言葉を真に受け、格式ある「ばってん」にかくも軽佻浮薄なる拙文を寄せてしまいました。衷心よりお詫び申し上げます。

ありがとう僕らの学び舎～62年間の感謝を込めて～

松浦東高等学校 濱野 亨

タイトルは、平成23年3月閉校となる松浦東高等学校62年間の有終の美を飾るキャッチフレーズです。正式には「栞の葉輝く東高～ありがとう僕らの学び舎～」となります。卒業生である地区内の住職の方が「僕らの学舎」と題し、自作の楽曲を創作（ギターの弾き語りで、永瀧剛風のすばらしい歌です。）、閉校へ向け生徒へ披露されたものを、文言を拝借しフレーズとしたものですが、ともかく「感謝」の心が入った秀作だと思います。

ところで、松浦東高には10年程前、長崎市内の商業高校勤務時に一度、学校施設見学で来たことがあります。海のそばの高台、絶好のロケーションでワシントン椰子と温室と強烈な風が印象的だったことを覚えています。

現在は、食品科学科と商業科の2学科編成、最終学年生徒数47人、職員数は臨時職員を含め21人の学校です。

昨年度、なにかの縁で赴任し閉校に関わり、記念誌等編集等を通して、学校の歴史を振り返る機会を得て、本校は、地域に支えられ育てられた学校であるということをお伝えしました。

本校は、昭和24年「北松地区の農業振興のためには、まず青年教育から」と当時町村合併前の今福町の強い熱意・要望のもと、「県立北松高等学校今福分校」農業科と農業家庭科、昼間定時制課程の学校として創立されました。

当初校舎施設はなく、地区の公民館・役場・中学校等に間借りし授業を行うという状況であり、併せて昼間定時という課程が生業（農業）を持つ生徒には苦痛だったのか、

退学する生徒が続出し、58人の入学生が翌年には僅か10人となったとのことでした。

また、「学校の施設が無い」との評判から、志願者数も次年度定員の3分の1と激減し、開校3年目にして早くも迎えた募集停止・廃校の危機を、町議会・保護者あがりの猛陳情により回避することとなります。

昭和29年には、町が学校経営の財源を確保できないことや生徒が集まらないこと等の理由により、県が不振校として「廃校」を決定したことに対して、町議会・保護者・教職員等町を挙げて必死の陳情・財源確保の画策と具体案提示・生徒数確保のための活動等を行い、やっと学校存続が認められることとなった経過もあります。

その後、「全日制への移行」「独立校として創立」「学科改編」「商業科を併設する学校への改編」等変遷を重ね、まさに地域の方々や関係者に支えられて学校が存続し、62年間の伝統と歴史を重ねることができました。

今回閉校を迎えるにあたって、閉校に関わる我々（生徒・教職員）のキーワードは「感謝の心」です。62年間に渡って支え育ててくださった地域の方々・同窓生・教職員・すべての関係された方々への感謝の意を込めて「ありがとう僕らの学び舎」と伝えたいと思います。



閉校と廃校

富江高等学校 稲垣 洋一

三年前に私が赴任した時には、既に閉校の方針は決定していたので、報道等で聞いていた高校存続運動も知ることは無かった。

しかし富江は、明治の初めに富江への併合を嫌って竹槍騒動まで起きた土地柄なので、さぞ激しかったことだろうと思う。高校改革推進室の人の「当時は富江で夜に飲むのが怖かった」という言葉が、それを物語っている。

ところで「閉校と廃校」は同じ意味だと思うが、「廃校」記念式典では確かに寂しすぎる。閉校というソフトな表現にしたところに苦労が偲ばれるようだ。この原稿が印刷される頃は富江高校は既に消滅している。

先日の職員朝会で、言わずもがなだが「本校は人間ならターミナルケアの段階で日々衰弱していく。業務の多少の不自由は我慢してほしい。」と発言した。数年前に父を病気で亡くした経験がダブっているのだが、人間と違って富江高校の死ぬ日は予め定まっている。肅々と葬送をするまでである。

分校時代を含め六十年の歴史に幕を降ろすのは容易では無い。とりわけ山のような不要品の処分には悩まされる。

「いっそのこと校舎ごと爆破してしまえばすっきりするのに」等と良からぬ考えが浮かんだりする。

幸いこれまでに閉校したところや県教委から、詳しいマニュアルをいただいております。閉校事務でとまどうことは無いのが救いである。

今後も県下で閉校は続くと思われる。私の乏しい経験でも参考になる日が来るかも知れないと、せっせと日誌を書いている。

腰折れ二首

生徒らの声沁み入りシグラントも

草むす原となりてゆくらむ

中庭の木々は芽吹けど学び舎は

春待たずして閉ずるが悲し



中五島高校に赴任して

中五島高等学校 一瀬 正史

私は昨年4月、以前事務職員として勤務した学校に事務長として赴任しました。

新しい環境と仕事に慣れなければならない新任事務長にとって、土地勘があるのはプラスでした。

「よく知っているだけにやりにくい」という事もあるのかもしれませんが、元々プラス思考なのでそう感じたのではありません。

かつてまき網で賑わった奈良尾商店街もシャッター通りになり、公金取扱銀行は青方支店に統廃合されていました。若松・青方間の国道は、トンネルにより時間が大幅に短縮され、便利になった反面中学生の進学にも影響を及ぼしています。時間の短縮は教職員の生活も変えてしまいました。

奈良尾や若松にある職員住宅は空き家が増え、半数以上の教職員が上方面から通勤しているのが実態です。生活の利便性を考えるとやむを得ない事なのでしょう。

私とは言う、17年前に家族と住んでいた奈良尾の仁田山住宅に単身で生活しています。

最近、カレーライス回数が少し減り、カレー臭も薄

れてきました。流行のタジン鍋を購入し、豚肉とキャベツとモヤシの蒸し焼きなど、ヘルシーな食事もしています。手作りハンバーグは得意料理のひとつになりました。

食べることと同じか、それ以上に好きなのがテニスです。でも、けっして上手くはありません。去年の夏から奈良尾中学校で、今年から若松総合グラウンドを借りて週一のペースでやっています。メンバーは地域の方で、テニス以外にも気軽に声を掛けていただいたりするのは嬉しいものです。

最近、抜き打ちの随時監査などもあり、毎日ビクビクしながら仕事をしている状況で、精神衛生上良くありませんが、これからも休日ぐらいいは楽しい事をして、ストレスを発散したいと思っています。



中五島高校 正門



若松大橋

私の趣味

五島南高等学校 金子 仁

20年目になる万年ビギナーの私が、思い出を辿りながら、シーカヤックの紹介をします。

カヤックに興味を持ったのは、当時アウトドアにはまっていて、川のカヌーイスト「野田知佑さん」の姿に憧れたからでした。

ただ、長崎県にはカヌーで川下りができるような川がなく、たまたま佐世保でシーカヤック（海で漕ぐカヤック）の体験スクールがあったので参加してみました。始める前にコーチに確認したところ、体重制限は無いとのこと、緊張しつつもいよいよ乗船です。いきなり2度続けての「沈」（船がひっくり返ること）。コーチが言うには、初めての人でも滅多に沈はしないそうです。少し慣れたところで、佐世保の地元メンバーが集う無人島まで、ちょっとしたツーリングです。そこにいた年輩夫婦が、タンデム（2人乗り）シーカヤックを仲良く漕ぐ姿に、自分の将来の姿を重ね合わせ、「いいなあ」と憧れたものでした。カヌーショップに戻ると、「2度も沈んだ珍しい生徒」として既に知れ渡っていました。

それからというもの一度で虜になり、自挺を購入し毎週のように琴海周辺の海で漕いでいました。ある時、岸壁でひとり漫画本を読む子どもにカヌー仲間が、「ひとりて来たよね」と尋ねたそうです。その子どもが言うには、「お父さんは海でカヌーに乗って」と。そうです、子守と称して当時8歳の息子に漫画本を買い与え、私はひとり海で遊んでいたのです。

そんな中、鶴南特別支援学校（当時鶴南養護学校）に転勤になり、肉丸事務長さんと出会いました。偶然にも、事務長さんもタンデムシーカヤック実践者。ゴールデンウィークにはご夫妻及びカヌー仲間と、泊まりがけで大村湾を漕いだものでした。

鶴南時代は、もっぱら蚊焼の海がフィールドでしたが、仲間7人の5挺で、五島の若松島を一周しようと遊びに行ったことがあります。初日の泊まりは、島北部の三年ヶ浦という入り江で、難破船が数隻見られました。各々テントを張ったあと、夕げというか酒盛りが始まり、一段落したあとで振り返ると、潮が満ちたために全員のテントが水没していたのです。当然寝袋のみで野宿です。大潮だったみたいで、夜中には寝ているすぐ近くまで水が迫ってきました。

翌日、漕ぎ出してしばらくすると、一艇のカヤックがすごい勢いで沖に向かって走り出したのです。潮流に乗ってしまったんだな、その人とはもう会えないかも知れないと心配したのですが、なんとか合流できたあとで本人に聞くと、「漕ぐのが上手いからスピードが出たんです」と笑っていましたが、手を動かしていたはずはなく、明らかに流されていたはずでした。

続いて、いよいよ若松島西側、奈留島との間にある滝ヶ原瀬戸です。漕いでも漕いでも左右の景色が変わらず、そのうち景色が進行方向に流れ出しました。潮流に負けて、ここで断念。上陸して晩飯用のアジゴ釣りに専念、結局半周しかできず、台風接近のため翌日には長崎に戻りました。じつに行き当たりばったりな旅でした。

さてその後、長崎鶴洋高校（当時長崎水産高校）では、カヌー部の生徒と一緒にというか、生徒の邪魔をしなから鹿尾川で漕いでいました。一度、生徒のレーシングカヤックを体験しようと挑戦しましたが、沈の連続でとうとう乗ることができませんでした。

現在、五島南高校に勤務し、たまにはありますが地元岐宿の海で遊んでいます。何と言っても海がきれい、漕ぎ出すには絶好の砂浜があります。海の上でボーッとすることもよし、漕いだ後のほど良い疲れも爽快です。

基本的に私の場合単独行動ですから、事故には細心の注意を払います。何を隠そう、ほとんどカナヅチなんです。そんな私でも楽しめるのがシーカヤックです。

勤務校が変わるたびに、新たなフィールドを体験でき、いろんな交流をもたらしてくれたシーカヤック、もうしばらくは続けられそうです。皆さんもどうですか。



随 想

「総合学科」発展のために

長崎県立五島海陽高等学校 校長 林 禮一郎

1. 将来の職業選択を視野に入れた、自己の進路への自覚を深めさせる学習を重視すること。
2. 生徒の個性を生かした主体的な学習を通して、学ぶことの楽しさや成就感を体験させる学習を可能にすること。
(学習指導要領より抜粋)

このことは総合学科高校の教育理念の大きな柱です。つまり、生徒一人ひとりの進路を実現させ、多様な能力や個性を伸長させるために、自ら学ぶ科目を選択し、自発的に学習に取り組む姿勢を養う。そのためには、「キャリア教育」と「体験学習」を充実させるということです。

平成 25 年度から年次進行で実施される新学習指導要領のポイントを見てみると、基本理念である「生きる力」の育成のために「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の調和が重視されています。具体的には、「基礎・基本を身に付け自ら学び、自ら考え、主体的に判断し問題解決する力」「自らを律し他人を思いやる心」「たくましく生きるための健康と体力」を育成し身に付けさせるということです。これは、まさしく総合学科の教育理念そのものなのです。

わが国に総合学科高校が誕生して 17 年目、現在、全国で 334 校、九州では 43 校を数えています。県内では、平成 10 年に 3 校が開校しました。13 年目を迎える今年度は 8 校で

普通科高校に次ぐ多さです。九州でも福岡県に次ぐ数です。また、平成 22 年度の長崎県における総合学科高校全体の入学志願倍率は、1.19 倍と県全体の平均を上回る高い倍率を残しています。以上のことから分かるように、今や総合学科高校は県民から広く理解と支持を受け、そのニーズに応えているものと確信しております。

しかし、総合学科高校は多くの人材（指導者）、経費、施設・設備が必要です。ご存知のように今日の日本経済の状況は依然と厳しく、教育界も同様で特に総合学科を取り巻く環境も年々厳しさを増しています。しかし、教育の質を落とすことは許されません。今こそ、教職員一人ひとりが、総合学科創設期の熱い思いを絶やさぬよう継承していく必要があると思います。そのためにも総合学科高校の教育理念の二大柱を改めて胸に深く刻み、時代の要請に応える総合学科のあり方を模索しながら、情熱をもって実践していくことが大切だと考えます。



広報部より



メルマガ共々広報誌も、会員の情報交換とコミュニケーションを提供する場であると思います。ご意見等ございましたら、型式にとらわれず忌憚のない意見、要望を随時受け付けておりますので申し出ただければと思います。

事務長会のホームページの「掲示板」の利用についても、活発なご利用をお願い致します。せつかくの掲示板ですので、日頃の実務の疑問、事案の根拠法は何？とか、余りにも基本過ぎて人には聞けない疑問等々活発に書き込みをしていただきますようお願い致します。

編集後記

今回は、ばってん編集を担当することになり、いざ編集に携わってみてその大変さを身に染みて痛感いたしました。広報部新人の私の原稿依頼に快く引き受けていただいた皆様方には深く深くお礼を申し上げます。今回は、特に閉校を迎えた学校の事務長様の寄稿を是非ご紹介できればと広報部でも計画してまいりました。閉校処理でお忙しい中にもかかわらず快く寄稿していただきました。“閉校”処理の大変さは人伝にお聞きしていました。地域の方々の御芳志等により開校した思い入れのある学校がやむを得ず閉校を迎えることは、地域の方々も無念であったろうと思います。時代の流れで、少子化には勝てずこれもやむを得ないことも事実であろうと思います。

閉校を迎えられたお二人の原稿を読んでいるとそれが強く感じ取れます。3月31日の最後の門扉の鍵を掛け、見送る人もなく最後に学校を後にすることは非常につらく切ないものであったと思います。本県において、学校に勤務する者として今後閉校の学校が無いことを願わずにはられません。

学校を取り巻く環境も今後の時代の潮流を受け日々変化していくのかなと強く感じる今日この頃です。
(K.M)

